

# 自打球

暁はじめ

画・新井由木子



東秀高校前でバスを降りて、校門をくぐった。築百年になるという、白い木造建築の校舎が見えた。

東秀高校の定時制を休学したのは昨年の夏。学校に来るのは、一年と一ヶ月ぶりになる。

職員室に入ると、黒縁めがねをかけた宮本先生の元に行った。

「脇田くん。いつまでも休学扱いはできないんだ。退学するか、復学するか、そろそろ決めて欲しいんだよ」

「……は、はい」  
視線をはずし、窓を見た。色付き始めたナナカマドがざわめいている。

退学か……。中卒になってしまふなあ。なんだか世間体も悪いし……。

そのとき、いつも黒い革ジャンを着込み、ヤニ臭い息をした山羽と灌口の顔が脳裏を横切った。

あいつらは今、二年。廊下で出くわすかもしれない。後頭部から、冷たいものが、したたり落ちたような気がした。

そう。どうせ半年しか通学していないし、単位だっほとんど取れてないんだ。

なんなら、あいつらがいなくなっているから、入り直したっていいんだし……。

「わかりました。退学します」  
そう言って、手続きを済ますと、職員室を後にした。

出入り口から外に出る。  
ふりむけば、くすんだ校舎が目に入った。白いペンキは